

センター つづい

No.118



目次

2025年3月

子どもの風景（第17回）	1
特集 子どもと共に歩もう	
先輩からのメッセージ	
実践記録を書こう	江島 隆二 2
私が辞めなかった理由	遠藤理香子 3
子どもを「かわいがる」	矢部 英寿 4
生徒が生き生き通える学校を	内記 英明 5
子どもとつくる学級・授業	
いろいろな子どもと学級づくり	佐々木大介 6
「海のいのち」の授業づくり	太田 陽子 8
ローバート キャンベルさん高校生公開授業・報告	
戦争のなかの言葉への旅	12
授業への招待⑭ 授業への挑戦 防災教育5年生	
「災害から命を守る」学習プラン作り	熊谷 鉄治 15
没後40年 林竹二先生のこと	春日 辰夫 16
子どもと学校	
子どもはすてき、授業はおもしろい	高橋 桂吾 18
教育時評	
技術教育のための教育条件整備	三谷 高史 20
おすすめ映画	大山あけみ 22
読書のすすめ（第19回）	矢部智江子 22
相談センター報告（第38回）	日下 幸子 23
一言	佐久間 徹 24
子どもの風景 作品について	鈴木 裕子 24
センターの動き・編集後記	24

表紙写真：高橋達郎

題字：江島隆二

子どもの風景 第17回

いつもとちがう佳奈

ゆり（小6）

今日なかなか佳奈さんが話しかけに来ないと思っていて、（何か怒っているのかな？）と思ったら、6時間目にもじもじしながら話しかけてきました。「あの……あ……朝はごめんね。」と言ってきました。私は、（ん？何のことだ……？）と思い、そう言えば！と思いたることが一つありました。実は今朝、消防署の信号のところで佳奈さんとばったり会い、目もバチバチ合いました。でも、佳奈さんはスタスタ歩いて行ってしまいました。追いかけてみたが、足が速くて追いつけませんでした。佳奈さんはそのことを謝りにきました。「ゆりだと思ったけどちがう人に見えた。」と言っていました。私はべつに気にしていなかったのですが、「そのことで今日話しかけてこなかったの！笑」とめっちゃ笑いました。元気がなく見えたので、このことでよかったです。

先輩からのメッセージ

小学校

実践記録を書こう

仲間とともに

江島 隆 二

今年の3月で定年退職を迎えます。23歳から教員をはじめ、今年61歳なので、38年間の教員生活です。なんとか最後まで一担任として、子どもの前に立ち、日々授業をし、子どもと共に生活できたことにほっとしています。よくがんばったと、自分をほめてあげたいです。長い間教員を続けることができたことに感謝し、教員にとって大事なことを私なりに考えてみました。

私は、宮城教育大学出身ですが、合同研究室で大変お世話になった久保先生の言葉に、「1年に一つでいいから、気持ちをを入れて実践に取り組む（実践記録を書く）」というのがありました。1年に1単元ぐらいは、教材研究をしつかりし、授業プランを練り、子どもの感想などを読み込みながら実践記録をまとめるといった取り組みです。そのような実践ができた年もありますし、日常の忙しさにかまけて、できない年もありました。自分なりに実践に取り組むことができたときは、充実していました。このことが教員を続ける一つの原動力になりました。

例えば、「きょうりゅうがりへいこう」という体育の実践をしました。小学校1年生と、陸上競技（走る、跳ぶ、投げる）という文化を追究するにはどうすればいいのか、教材から見直し、子どもたちの声

を聞きながら実践を進めました。いろいろなぐにやぐにやコースを走ることから、ダンボールを跳びながら走る障害走へ、そして、ダンボールをくつつけることで走り幅跳びのように助走からの跳躍、最後は、学習した運動をつなげて、きょうりゅうにボールをぶつつける「きょうりゅうがりへいこう」という実践を創りました。

この実践を構想するに当たって、どうすれば「陸上競技」という文化を小学1年生と追究できるかを考えました。例えば短距離走は、1年生にとってはそのまま学習させるには無理があると思ったからです。そこで、それぞれの競技に分化していく前の、いわば「文化の源流」のようなものであれば、1年生と一緒に追究していけるのではと考えました。これは、学生時代から関わっている「学校体育研究同志会」（以下同志会）という体育の研究団体の「中間項」（競技の特質を持ったより簡単な運動）や「基礎技術」、数学教育協議会（数教協）の具体物と抽象（数）をつなぐ「半具体物」（タイル）のような考えにヒントを得ました。

実践を進めるにあたり、子どもがどのように感じたかを感想文を書くことで言語化させ、それを読み合い、交流することで実践を進めていきました。これは、宮城保健体育研究会（宮城保体研）が大切にしていたことでした。

このような実践は、一人だけで進めるのは難しいです。私の場合は、同志会の仲間がいました。実践の構想を話し合ったり、実践を進めていくときにアドバイスをもらったり、実践終了後に検討し、実践の意義や課題を明らかにしてくれたり、実践記録にまとめていくときのポイントを示してくれたり……。仲間がいたからこそ実践を続けることができました。

今の学校現場は、管理や統制、スタンダードという名の同調圧力が強まってきており、どんどん息苦しくなっているように感じます。物



理的には忙しくなるかもしれませんが、心の健康を取り戻すために、実践記録を書くことをお勧めします。

(黒川・宮床小)

中学校

私が辞めなかつた理由

—1・2・3—

遠藤 理香子

効果的なアドバイスとは、「聞きたい時に聞きたい人から貰うアドバイス」だと思う。だから、まずは自分であれこれ試す。困ったり迷ったりした時に聞きたい先生からアドバイスを貰う。咀嚼し修正してまた試す。こんな事を繰り返して若い先生達には成長してほしいと願っている。

私は2020年3月、コロナによる緊急事態宣言の最中に定年退職したが、つてコロナ禍下の学校を知らない。確かに多忙・教員不足・不登校等は以前からの課題だが、5年を隔て大きく変わった学校現場を共有していない私なので、アドバイスできないが「辞めなかつた理由—1・2・3—」なら語れるかもしれない。

1 事象の確率1/2

20代の頃は1980年代。校内外暴力・学校の荒れが全国的に問題になっていた。指導・プランと授業妨害とのいたちごっこ。校内からは様々な音や声が頻繁に聞こえていた。20代の私は、手持ちのチョーク入れに「3・7」と書いたシールを貼っていた。自分を励ます数字だ。「先ずは3日やってみる、ダメだったら別方法でまた3日、結果は7日経つ頃出始める」こんな調子で3週間・3か月・

3年……。何とか言い聞かせ乗り切れたものもあったが、失敗の連続時には、最強の言葉「事象の確率1/2」が支えてくれた。今は負けが続いていても、腐らず確信が持てる方法で続けていけば、いずれ勝ちが続く時やってくる。勝負を降りない限り確率は1/2なのだ。それを見るまでは辞めない。

2 強みを持つ

教職を目指す理由はそれぞれ。まるで「脱皮か」と思うほど精神的に成長する中学の時期に私も関わりたいというのが教員志望の理由だが、国語教員として採用されたのだから教科指導の力を付けてなんぼの公務員だと思う。中でも私は表現(作文)に力を入れた。教科は勿論、道徳・学活も最後は書かせて共有する。大事にしたかったのは「価値観は様々で自分の考えもその一つ。伝わる文章を書かないと考えは伝わらない」ということ。学級日誌で「日直の感想欄」がいつの間にか生徒発テマのリレートーク欄になるのが楽しかった。強みは自信になり、指導法の研修やその他の分野・職務にも意欲的に取り組めるようになると思う。強みを持つまでは辞めない。面白いのはそこからだから。

3 職場から力を貰い、職場の力になる

職場の雰囲気はどうなのだろう。日々の業務・経験の浅さ・教科指導・保護者対応・職員室の人間関係……。躓いて当然なのに、できない自分にプレッシャーをかけてしまう。どこからがSOSなのかも分からないので、相談のタイミングを外し、結果、事が大きくなり迷惑をかけることも私は度々だった。そこで一つの対策。個々に生活事情・教育観は違うが、目の前の生徒は共通項。幸い中学は教科制なので複数の違った目で見る事ができる。同じ生徒が教師によって全く違う顔を見せる面白さ、異なる「篩(ふる)い」があるお陰で救われる生徒がいる安心感、そこから来る職員同士の信頼感。生徒



の話題で世代・役職の差を超えて、多くの先輩からヒントや一緒に取り組む力を貰える。繰り返すうち、いつの間にかヒントを与える側になっていくこともある。こんな関係が築けたらもう辞めようとは思わない。

これはあくまで私の理由と対策だ。「教師受難」といわれるこの時期に、あえて教職を目指したのには大志があることだろう。その大志（希望・覚悟）に向け存分に励んでほしいと思う。教育とは「ちよつと先の国家を作る」「人間の成長に関わる」本当に素敵な仕事だと感じる。しかし無理は禁物。どうしても心身がもたない時は休んだり、時には別の道を歩んだりすることもあつて良い。その時は自分の判断に自信を持った選択であつて欲しいと願っている。

（元中学校教員）

中学校

子どもを「かわいいがる」

矢部 英寿

教職に就かれた若い先生方、この仕事を選び子どもたちとの濃密な生活を送り始めたことに心から祝福の気持ちをお伝えしたいと思います。

教職を続けていく上で大事なことは、とにかく子どもをかわいいがることです。大人としてかわいいがる。相手をするのは子どもです。先生は大人です。大人として子どもを愛情深くかわいいがる。時には無理をしてでもかわいいがる。教師として大事にしたいことです。

ところが、かわいいと思えない時も起きるのが学校です。子どもは無遠慮に悪態をつくこともあります。どんなに丁寧に教えてもやる気になつてくれない時もあります。わざと困らせようとし

ているような様子さえ見えます。教師だつて人間ですから頭にきたりもします。でも、こういう時こそまずはかわいいがる。大人ですから。そうすれば、悪態をつく子、やる気のおきない子、困らせる子の背景に思いをはせることができます。その子をそのようにしている要因は何なのか、学校の外でどんな生活を送っているのか、どのような育ちをしてきたのか、どのような人間関係にあるのか、ということを考えます。こうなると、子どもが困っていることの本质に対して教師と子どもで同じ方向で目を向けることになります。子どもよ、悪態をつく対象は私ではない、君と私は共同して君を困らせているものに立ち向かう同志だ、という関係をつくることです。

授業でも子どもと教師でそのような関係性が築ければとてもおもしろいことになります。すべての授業でそのようになるのは容易ではないのですが、先生も疑問で、子どもも分からないことを共同で探究する授業が最もおもしろい授業です。そうすると、教えられる子どもと教える教師が、同じ疑問を探究する共同研究者という、これまた同じ方向を向いた関係になります。そのためには、教える内容に関して、教材研究で教師がもった小さな疑問を素通りしないで子どもにも聞いてみることです。教師にとつての小さな疑問が、子どもにとつてはとても大きな意味をもつ疑問だったりするものです。教える教師と教えられる子ども、かわいいがる教師とかわいがられる子ども、悪態をつかれる教師と悪態をつく子ども、さらには子どもと子ども。そんな関係がとても繊細で複雑だけれども、それでも深くつながっていくことは教育という仕事の醍醐味です。

さて、そんな教育という仕事にある甘い夢を壊すようなことが、仕事上起こります。子どもとの関わり合いを困難にするような上からの仕事の押しつけには怒つてもいいということです。それらの中には、「やつてましたよ」というアリバイづくりや、学校としての体面を保つための仕事もあったりします。例えば生徒指導上の様々な調査



例えばやりすぎの感染症対策、あるいは必要以上に使えといわれるタブレット。その他にも、勤務時間の中でやれることの限界までやっているところへ、「やらないよりやった方がいい」という理由で仕事がおりにきたりもします。これらは大人と大人の関係ですから、頭にきていいことです。頭にきたならば、それはあなたが子どもをかわいがることを一番の基本に据えていることの証です。頭にきている大人は他にもいるはずですから、手を結んで解決していけばいいのです。手を結ぶことのできる仲間は、職場の中にも職場の外にも必ずいることを忘れないでいてください。

(元中学校教員)

高校

生徒が生き生き

通える学校を

内記 英明

教職に就き、これからの高校教育を創っていく皆さんにエールを送ります。

高校教員の仕事は、分類すると生徒と直接に関わるクラスづくり、授業づくり、部活指導、それらと関わっての保護者との関係づくり、そして職場の同僚との関係づくりの2つに大別されると私は考えています。

前者の仕事において最も肝要で重要なことは、クラス担任として生徒全員の名前と顔を憶えること。そして一人ひとりの背後にある家庭環境なども面談や雑談を通じて把握しておくことが大切です。そのためにも普段からフランクに話せる雰囲気づくりがなければなりません。授業づくりで私が一番に心を砕いてきたのは、如何に分かりやすく説明するか、教える内容を私たちの日常の出来

事や自然・社会現象などと関連させながら説明してきました。1コマの授業で9割の生徒が内容に興味を持ち、真剣に考えてくれたなら授業づくりは成功だと思ってきました。しかし、何回

もありません。部活動においては、新任教員に限らず現職でも希望する部活を担当することがそうそう叶いません。そんな現状で、顧問として大切なことは、率直に分からないことは分らないこととして、詳しい教員や専門家に教えを乞うことが大切だと思います。ややもすると運動部などでは、生徒の方が知識や技術も詳しい場合もあります。そんな時は、生徒に教えてもらい、生徒を褒めてやるのが大事です。大切なことは、授業でも部活でも生徒たちと一緒に協働しながらその目標を成し遂げていくことが何よりも尊く、大切な事だということです。

仕事をやり遂げるには一人の力だけではできません。自分の周囲にいる人たちの協力が必要です。実習(助手)教諭、養護教諭、栄養教諭、図書司書、スクールカウンセラー、技師さん、事務室の事務の方々など様々な専門の人たちがいます。教員は、往々にして自分たちが生徒をよく知っていると思いがちですが、教員以外の人たちも生徒をよく観ています。常日頃から校内の専門の方々とも挨拶を交わし、雑談しておくことが大切です。思わぬ機会にモヤモヤしていた問題が解決に結びつくことがあります。

最後に、生徒たちの背後で生徒たちに期待し、応援している保護者への対応です。若い先生方は、年上の保護者と対話するのは苦手と思っている方も多いと思います。大方の親は自分の子どものことを分かった上で様々な要望、苦情、無理難題をぶつけてくることもあります。どんな場合でも親の言い分をよく聴き、背後にある本当の問題を見つけ、親と一緒に解明し、解決に導いていければ素晴らしいと思います。

参考文献：小野田正利著『それでも親はモンスターじゃない』

(学事出版)

(元高校教員)



いろいろな子どもと学級づくり

佐々木 大介

1 はじめに

学校の世代交代が急激に進み、職員室に若者の活気が戻ってきた。何事にもチャレンジしてみようとする青年教師の姿を見ていると背中をそっと押してあげたくなる。一方で学校スタンダードが浸透し、型通りの授業や決められた行事をこなすだけで精一杯の状況にあえいでいる教師をたくさん見かける。GIGAスクール構想のもと個別最適な学びが導入され、ひたすらタブレットを使うドリル学習はシーンとして意欲的に学んでいるように見えるが、そこに旺盛な対話や豊かな学びはない。小中学校における不登校は過去最多の34万人を超え、10年前に比べると2倍超え。「不登校」をめぐる学校・教師と子ども・保護者の意識のすれ違いも見逃せない。不登校34万6482人という数字は学校のあり方を問うている。また、精神疾患で休職した公立学校教員が6500人を超えた。「魅力ある学校づくり」と叫ばれているが、現実はそのなっていないことをこの数字は物語っている。発達の課題を抱える子、貧困や虐待など不

適切な養育環境のもとで育つ子、セクシャルマイノリティ、ヤングケアラー、外国にルーツを持つなどいろいろな子どもがいるのが教室である。さまざまな困難や課題を抱えている子が安心して生き生きと過ごすことができる教室をどうやって創っていくのか。どのような学級づくりをしていけばよいのか。困っている子に寄り添うだけでは居場所となる教室は創ることができない。簡単ではないが、それが今の教員に求められている。

2 こんな子いませんか(1年生教室)

1年生の南は登校すると私のところにまっしぐら。抱っこしたままランドセルを開け連絡帳をチェック。これが毎朝のルーティン。「ギューして」、授業中でも抱っこを要求する。「今は授業中だからだめだよ」と声をかけるが、抱っこしてもらうまで「ギューして」と言い続ける。唯も南と同じように私の前にいる。「席に戻りますよ」「なんで南ちゃんばかりいいの?」動こうとせず同じやりとりの繰り返し。離席に抵抗がない。南だけじゃないよ、みんなのこと見

てるよ。彼らの行動は自分だけを特別扱いしてほしいという要求だ。座っていられない南を非難したり、冷やかしたりする声があがる。「ばぶちゃん」は保育所に戻れ」「支援学級に行った方がいい」「挑発行動はあつという間に広がる。座っていないことがだめと思う子たちが南をおおる。子どもたちは平気でひどいことを言う。「ばぶちゃんとか保育所に戻れと言われてうれしい人は手を挙げて」首を振り誰も手を挙げない。異質なものを排除する気持ちに誰にでもあり、それを揺さぶるいい機会である。小学校入学まで座っていることが当たり前。先生の言う通りにするのが正しいこと。一度身に付けた鎧を脱がせてあげることが必要だと感じた。

「教室にはいろんな子がいます。席に座っていない子、うそをつく子、心配で教室に入れない子、たいたいたりけたりする子、それが教室です。1年生が終わる頃にはみんなできるようになっていきます。だからそんな子を応援してくださいね。」うなずきながら聞いていたがその行動はなくならない。南の行動を受容する雰囲気をつくりたい。教師が守ったりかばったりすることを模倣する子はいるが、手伝ってあげるだけでなくおもしろい子だという見方をしてほしかった。

南が欠席すると立ち歩く子もいないし指示が通る。確かに一見落ち着いているが解決したわけではない。南抜きのクラスは考えられない。南が居心地のよいクラスづくりをすることが他の子にとっても安心して過ごせる教室になる。南が休むと休み時間に抱っこされたい子が集まってきた。南が私を独占していたので入り込めない子たちだった。うれしそうな表情を見る

といつも我慢しているがやってほしかったのだ。「授業中はできないけど休み時間はしてあげるからね」うれしそうな表情が頭からはなれなかった。その後「どうして南だけ」と言う子が少なくなり立ち歩きも減っていった。

南を応援する子と同じ班にした。「保健室に届けてください」「了解」南は喜んで仕事をする。プリント配りやお手伝いは大好きだが自分のことはやらない。朝の健康観察では一人ひとり名前を呼んでいたが班からの発表に変えた。南に「リーダーに健康観察教えてきて」「わかった」と報告に行き、戻るとききまでのことを続けた。班の仲間は南との会話ができていることを感じメンバーの一員であることの意識を強める。

黒板の絵には意味があった。運動会の招待状に「お母さんやお父さんにどんなところを見てもらいたい?」「徒競走で優勝するところ」、南は黒板にお絵描きを始めた。あとから絵の帽子に「1」と描いていたことを子どもたちから聞いた。言葉にはしないが徒競走で一等になることを伝えたかったのだ。南の行動を認めてもらう声かけばかりしてきたが南の描いた絵をきっかけにみんなが考え交流することで居場所ができるのではないかと考え直した。南を生かす集団づくりは自分を表現できない子にも居心地のよいクラスになる。そんな視点をもつと黒板を意識するようになった。『あいうえお』の学習で南は「いきしちに」と書いた。「わけわかんないこと書いている」教科書で確かめると「あかさたなの次の段だ」と発見した。授業は予想しない方向に進むが刺激のある学びとなった。南は授業中でも自分が気になることを黒板いっぱい書くので見えづらいと抗議があった。書かな

いでも言われてもやめることができない。「南が好きに書くスペースを作ればいい」と龍が提案。南だけが自由に使う「南コーナー」というスペースができたが、描きたい気持ちはその枠には収まらない。やりたいと思うと行動を抑えられない特性だ。だめなできない子というイメージではなく南を見直す見方を増やすことがいい雰囲気をつくる。「また南ちゃんのおかげで新しい勉強できたね」という友だちの声を聞きちよつと得意げな表情を見せた。

3 いろんな子がいます(6年生教室)

「おはよう!」と声をかけると「きしよ」「きもつ」という返事。「国語の準備するよ」「は無理」と即答。「めんど」「論外」が口癖。しかし「理科室に移動して」「やだつ」と言いながらも並ぼうとする。「先生のこと大ちゃんって呼んでいい?」「お姉ちゃんも大ちゃん先生って言った」「大ちゃん先生でもいいつか」「ううん大ちゃん」「えつ」「大ちゃん」まあいっか。それ以来おとなしく真面目な子も学年のみんなも大ちゃんと呼ぶ。こんな呼ばれ方をするのは教員になって初めてだ。

運動会の応援練習が終わると力尽きる。ソーランや徒競走では列から抜け私のそばにくる。「みんな練習しているけどどうしたの?」「はあ、だりいからここにいます。先生たちみんな校庭なのに大ちゃんなんで日陰なの?」「暑いから。年寄りは大事にしないとね」「なんでこんなときばかり年寄りになるの?」「いつも若いって言うてるじゃん!」「そばにいてあげる」「遠慮します」、能力は高いが同じことを繰り返す指導を拒否する。



教室に一人でしたので聞いた。「なんで授業行かないの?」「めんどいから。それにあれぐらいやんなくてもわかるし」「勉強が嫌なわけじゃないんだ」「先生がイラつく。なんか上から目線で子ども扱いしてくる」「だって子どもだもんね。仕方ないじゃん」「こうしろ! ああしろ! っとうるさい。めっちゃむかつく!」「そうなんだ。でも授業は出てるじゃん」「去年は出なかった。おしつけてくるからバトルになる!」「嫌いな先生多いね。好きな先生っていないの?」「あつ、もちろん先生をのぞいてね」「はあ、あんまりない。授業とか話とかつまんないくせにいろいろ上からやれって言われると本当我慢できない」「まあ先生の授業はおもしろいからね」「当たり前じゃん30年以上教師やってんだから。それで授業下手だったら終わってる」「この対話だけを聞くと、どれだけ教師のことを拒否しているかを感じる。でもこの子はいつも鋭い発言で授業

をリードし、理解できないことやおかしいことに
対してすぐに疑問を投げかけてくる。背伸びした
ら届くような課題やジャンプしないと解けないこ
とに対しては夢中で取り組む。態度や言動だけし
か見ていなかったらリアルな声は聴き取れなかつ
たと強く思う。

拓がおもしろいことを言う。「俺は放牧してく
れる人じゃなきゃだめなんだ。そうじゃないと何
もやる気にならん」「それって教室で自由に歩き
回るってことでしょ。立ち歩いちゃだめって座ら
せる先生はムリっていうこと？ マイペースで過
ごしたいんでしょ。しばられるの嫌なの？」「放
牧がだめって言う人の時は教室を出てた。きちつ
としすぎてると疲れる」「いちいち言われるのう
ざい。歩き回ってるけど話は聞いている」「人は
自由だからこそ自由なアイデアが生まれる」「切
り替えられればいい。大ちゃんが聞いてって言っ
たときにみんな聞いている」「じつとしてんの苦手。
わたしも放牧されたい」「えっ、ちゃんと座って
るじゃん。放牧されたいの？」「放牧されたい。
でも誰も聞いてなかったら大ちゃんかわいそうだ
から座って聞いてあげてる」

4 おわりに

ゼロトレランスや学校スタンダードが通用しな
い子どもたちが教室にはいる。特別なニーズを持
つ子だけでなく子どもの声を聴き取れない不寛容
な指導を拒否する子もいる。私たちは全員を同じ
ような子にすることを過剰に求めているのか？

異質なものを排除する雰囲気自らつくってはい
ないか？『みんなちがってみんないい』という金
子みずぶさんの詩がある。教師が好む言葉ではあ
るがどれだけ実践できているのか。

『生活指導』（2025年2・3月号No.778）
に次のような文章があった。

『なんでも相談してね』って言われても
怒る先生には相談できない」と6年生のヨ
ウが話しました。「話したいと思った先生
いた？」と尋ねるとヨウは「いない」と応
えました。

困難な課題を抱えた子どもの声を傾け、共
感的に苦悩を受け止める個人指導は大切である。
同時にそのつらさを信頼できる学級の仲間に広げ
る集団指導を結び付けて展開することはさらに重
要になる。楽しい活動を通して子どもたちをつな
ぎ、そのプロセスで生じたトラブルを読み解き相
互理解を深めていく。表面的な指導やテクニク
だけでこのような指導はできない。楽しい活動を

したからできるものでもない。何のための活動か
を頭の片隅に置いて子どもたちの声を聴かなければ
彼らの生きづらさにふれることができない。また
トラブルを起こさない子の中にも思いを聴き取ら
れてこなかった子どもたちもいる。多忙な中でも
子どもをとりまく状況に敏感になり、教師が子ど
もの背景に思いをはせることが対話を始めるきつ
かけとなる。目の前のトラブルは、自身が抱える
課題を自分自身で解決することができないからで
ある。問題行動の背景には、もうこれ以上傷つき
たくないという願いが隠されていることを読み取
る必要がある。子どもたちのトラブルから聴き取
るという行為を集団に広げることを意識し、わた
したち教師が語るに値する存在にならなければな
らないと常に自分に言い聞かせている。

（仙台・長町小）

子どもとつくる学級・授業②

『海のいのち』の授業づくり

太田陽子

1 なぜ文学作品にこだわるのか

振り返ってみると、きっかけは小学校の時に学
んだ国語の物語文だったように思います。面白さ

を感じつつも、どこかに引っ掛かりがありました。
『こんぎつね』の悲しい結末は、小学生の自分
はただ『くんが死んだ』バットエンドな物語でし
た。『ヒロシマのうた』の原子雲の刺繍からは、「ヒ

ロ子ちゃんってネガティブだな」という印象が残りました。大人(教員)になつてから、『こんぎつね』にはごんの想いとそのすれ違いの悲しさがあること、『水色の原子雲』には戦争に負けない前向きな気持ちが込められていることを知りました。仲間と文学作品を丁寧に読む中で、子ども時代に持った疑問や引っ掛かりが少しずつ取れていきました。それ以上に、自分一人では感じ取れなかった登場人物の心情に気付いたり、その人間が生きてきた時代背景などを考えたりするようになりました。作品は読み手(教師も子どもも)の心を深く豊かなものにしようになりました。

読み取りにかける私のエネルギーは、作品を通して、自分の世界を広げる楽しさや喜びを子どもと共有したいという願いからです。以前『世界一美しいぼくの村』を読んだときは、主人公ヤモが自分の村を想う気持ちを読み、自分たちが住む秋保の自然について改めて思う子どもたちを見ました。『ヒロシマのうた』を読んだときは、義母の迷いながらもヒロ子ちゃんを自分の子として育てる姿に、心を強く打たれている子どもたちが見えました。そういう子どもの姿を授業を通して見たいという強い思いが、私のこだわりを生んでいるのかもしれない。でも、思いの強さと裏腹に、一筋縄ではいかない授業の難しさも同居しています。

今回は、24人の6年生と取り組んだ『海のいのち』の授業から、山場となる部分を報告したいと思います。

2 太一の葛藤を作ったものは

なんだろう

『海のいのち』の主人公太一は、父の死をきつか

けに瀬の主と対峙することを願い、与吉じいさや父の生き方、母の想いを背負って漁師の道を歩みます。ところが、父を破ったと思われる瀬の主に出会った太一は、その姿、たたずまいに、これまで持っていた漁師のあり方を大きく揺さぶられます。その部分の記録が次のものです。(□内は教材文)

もう一度もどつてきても、瀬の主は全く動こうとはせず太一を見ていた。おだやかな目だった。この大魚は自分に殺されたがっているのだと太一は思ったほどだった。これまで数限りなく魚を殺してきたのだが、こんな感情になったのは初めてだ。この魚をとらなければ、本当の一人前の漁師にはなれないのだと、太一は泣きそうになりながら思う。

T 水面から戻ってきたとき、瀬の主はどんな様子だと太一は思ったんだろう。

C うごかない。

C おだやかな目をしている。

C 殺されたがっていると思った。

C こんな感情になったのは初めてだった。

T 「この魚をとらなければ、本当の一人前の漁師にはなれないのだと、太一は泣きそうになりながら思う。」とはどういうことなのだろう。

C おとうをやぶったクエを倒さなければ一人前の漁師になれないと思った。

C 泣きそうになっているから、本当は殺したくないけど、殺そうとしている。

C 葛藤している。

T クエを殺さないと一人前の漁師になれないと

はどういうことだろう。村一番の漁師とは違うのだろうか。

C 一人前になると誰からも認められるから、一人前の漁師になりたかった。

C 一人前の漁師というのは一人で全部できる漁師。

C 村一番の漁師は村の人から認められているけど、一人前の漁師は村以外の人からも認められている漁師。

(前回まで読んできたところから「村一番の漁師」を探し、もう一度意見を求めた。)

C 村一番の漁師は、与吉じいさが「千匹に一匹」を守って海を大切にする漁師だと思う。

C 父も村一番の漁師で、「海のめぐみだからな」って海に感謝していた。

C 与吉じいさは、太一は「村一番の漁師」と言っていたから、太一は村一番の漁師だけど、なんでも一人でできる一人前の漁師になりたかったんだと思う。

(私は「一人前の漁師」とは、「クエを殺すことでなれる、父を超えた漁師」と考えていましたが、子どもたちからなかなか出てこなかったで、これ以上は聞きませんでした。)

T なぜ太一は泣きそうになっているのだろう。

C 殺したいけど、殺したくないと思っっているから。

C 大魚からなにか感じた、もったいないと思っ

ているんだと思う。

C クエがすごいから、死ぬかもしれないって恐怖もあるかもしれない。

C クエを殺して本当の一人前の漁師になりたいと思っ

【授業後の検討会から】

○難しい問いかけに対して子どもたちはよく考えようとしている姿がとてもいい。それを前提にして、感じたことを述べる。まずこの場面は、追い求めているクエと出会ったところから始まっている。本時においても太一の前にクエがいる。そのために板書を工夫してクエの姿が見えるようにしてはどうか。

○「一人前の漁師」と「村一番の漁師」の違いに重点を置くのではなく、まずは、太一が見た瀬の主の姿や対峙しているときに圧倒されている太一の内面を読み取ることが大切ではないか。授業記録を見る限り、その部分に関しては確認程度で終わっているの、鉾で威嚇しても全く動じることのない主。再び戻ってきて、逃げるそぶりなど全く見せずに、ただただ穏やかな目で太一を見ている姿。太一に、「殺されたがっている」と思わせるほどの穏やかさ。殺しに来た俺をも受け入れようとしているのかと驚いている太一。そういう太一の内面を含んで、「これまで数限りなく魚を殺してきたのだが、こんな感情になったのは初めてだ。」と表現されている。魚でありながらどこか畏怖を感じている太一をもう少し読みあってもよかったのではないか。葛藤の始まりは、このクエに何を感じたかが大事だと思う。

○瀬の主と対峙したことによって、父を破った瀬の主を倒してこそ「一人前の漁師になれる」という太一の漁師像が大きく揺さぶられている。とするなら、子どもたちの「殺したいけど、殺したくない」「大魚から何か感じた」「殺したら与吉いいさや父みたいになれない」という意見

をそれで終わりにせず、「殺したいけど、殺したくない。どういうこと?」「父みたいになれないってどういうこと?」と切り返してもよかったのではないか。この学級なら内容を膨らませることができたように思う。など

3 葛藤をどう乗り越えたのか

水の中で太一はふつとほほえみ、口から銀色のあぶくを出した。もりの刃先を足の方にだけ、クエに向かつてもう一度えがを作った。

「おとう、ここにおられたのですか。また会いにきますから。」

こう思うことによって、太一は瀬の主を殺さずにすんだのだ。大魚はこの海のいのちだと思えた。

昨日は、太一がクエを殺すか、殺さないかで葛藤していたところでしたが、「本当の一人前の漁師」に固執してしまったので、すっきりしないまま時間切れとなりました。今日の時間は、瀬の主とおとうを重ねることで、「殺さずにすんだ」という思いに至る太一の心情を読み取ろうと思いましたが、その一部です。

T もりを下げて、クエに向かつてもう一度笑顔を作ったということは、何を意味するんだろう。

C 一度ふつて笑っている。

T ふつて笑っているということは?

C 自然に笑っている。ふつとだから。

C 作ったと言っているから、自分の意思で笑顔を作ったということ。

(泣きそうになりながら)から「ふつとほほえみ」

に変わったのだから、太一の葛藤が溶けたことをまずはつきりさせたかったのですが…。)

T 『おとう、ここにおられたのですか。また会いに来ますから。』こう思うことによって太一は瀬の主を殺さずにすんだ。」とあるね。どういうことなんだろう。

※なかなか意見が出てこなかったもので、時間をとって近くの人と話し合いの時間を作った。一度目の話し合いの時間で、太一が言った言葉のみを考え、「おとうクエ」について話し合いをしているところが多かったので、改めて「おとうすんだのだ。」までを考えさせた。

C 殺さずにすんだと言っているから、殺したくなかった。

C こう思わないと、クエを殺してしまうから。

C 太一がおとうだと思ったのは、漁師が見たのは緑の目で、今回の青い目だからおとうだと思った。違うクエだと思ったから。

T 「こう思うことによって……」とあるけど、太一はこのクエをおとうだと思っているの?

C 思っていない。そう思い込ませようとしている。

C 自分に言い聞かせている。

T なぜそうするの?

C 瀬の主を殺したくないから。

C こう思うことによって殺さずにすんだ。

T 瀬の主のどんな姿を見て「おとう」と思ったんだろう。

C おとうが挑んだクエだから。

C おとうもただものではなかったから。

T 「も」ということは、クエも?

C ただものではなかった。

C 自慢をしない感じがおとうみたいだと思っ

た。自分から、かかってこない感じが自慢しない感じ。

C 性格みたいなのが似ていると思った。自慢しない感じとか、怖い感じとか、大きい感じとか、ただものじゃない感じが似ていると思った。

C 瀬の主も同じようにこの瀬の支配者みたいだったから。

T なるほど、だから「おとうくきますから。」という言葉をかけたんだね。

【検討会から】

○太一の葛藤が変化したことを読み取るために、「もう一度えがおを作った」から入って、ちょっとややもやしている。前の時間の内容が全員の子どもたちに残っていればいいが、前時とつないでやったほうが親切。「泣きそうになりながら」から「ふつとほほえみ」「笑顔を作った」を並べるだけでも、太一の葛藤が変化もしくは乗り越えたと分かるのではないか。

○「おとう」と「瀬の主」の何が重なったのか。子どもの発言「ただものじゃない」をきっかけに、「自分から、かかってこない感じ」「自慢しない感じとか、怖い感じとか、大きい感じとか」が語られる。太一の葛藤を越えさせたものを何とか読み取ろうとしている姿が伝わる。

○「この魚をとらなければ、本当の一人前の漁師になれない。」という太一の考えを変えたのは、クエの存在感と「おとう」の姿を重ねたこともあるが、与吉いさと父が折々に見せてくれた海との向き合い方を葛藤の中で改めて思い起こしていたのではないか。そして、その本当の意味をクエを前にしてつかんだのではないだろうか。このお話が、太一の成長の物語と捉えるな

ら、単に殺さずに済んだだけでなく、海と暮らす漁師の在り方を深く学んだということにならないだろうか。など

4 授業を次につなぐ

毎時間の授業の後に感想を書かせてきました。例えば、太一が瀬の主とおとうと似ている部分を感じていたのではないかと話し合った日、「Tさんの『太一はおとうにあこがれていたから、同じように自慢しなかった』という意見に納得した。」「Kさんの『自慢していないところ、おとうと一緒にで大きいところ』という考えに、なるほどなと思いました。」「性格などが似ているなという意見に納得し、自分もおとうと似ているところを発言することができた。」など、友だちの考えに耳を傾け、自分の読みを広げようとしていることが見えました。また、授業の中であまり触れなかった「銀のあぶく」について、自分なりに『海のいのち』に出てくる色について考えてくる子もいました。「海のいのち」を通して、友だちと読み合うおもしろさを少しは感じているのかもしれません。

そのような子どもたちを前に、もっと手ごたえのある教材をぶつけてみたいと思いい、6年生最後の授業として『ヒロシマのうた』を取り上げました。社会科で太平洋戦争について学んだこともあったのでやってみたい作品でもありました。まだ途中ではありますが、子どもたちは『海のいのち』の時よりも、積極的に自分の考えを発表し、友だちと意見をやり取りすることが多く

なったように思います。また、自主勉強で「こんこん」とや「そんなこと」などの意味を調べ、より深く読もうとするような姿が見られています。『ヒロシマのうた』をやることは『海のいのち』が終わった後に、予告していたのですが、何度か「まだやらないの？」と聞いてくる子もいました。このような姿は『海のいのち』をみんなで読んだおもしろさが土台になっているのかなと思います。『ヒロシマのうた』はまだあともう少し続きますが、物語を深く読むことのおもしろさと友だちと考え合うおもしろさが重なるような授業にしたいと思っています。

(仙台・西多賀小)



ローバートキャンベルさん

高校生公開授業・報告（感想）

戦争のなかの言葉への旅

2024年12月14日（土）ローバートキャンベルさんを迎えての高校生公開授業が、29名の高校生たちと60名を超える参観者のもとで行われました。

授業は2コマ行われ、1コマ目は、戦火を逃れてきた人々から聞き取った話を詩人のオスタップさんがまとめたテキストに出会い、『戦争語彙集』として出版するまでの経緯や思いを、キャンベルさん自身の研究との関わりや、ウクライナに行きオスタップさんや避難してきた人々と交流したときのことなどを交えて話しました。

2コマ目は、今回のテーマ「戦争のなかの言葉」を高校生たちと考えるために、『戦争語彙集』の中から3つの表題の文章「沈黙」「ココア」「猫」を取り上げて授業しました。

3人の高校生の感想を紹介して授業の報告にしたいと思います。

本当に知るところ（H・Yさん）

ローバートキャンベルさんの公開授業は『戦争語彙集』というウクライナの方々から聞いた体験談を集めた本を土台に行われました。

最初にキャンベルさんがウクライナの方に「日本の方に何か伝えたいことはありますか？」と聞

いた時のことをお話していたのですが、そのウクライナの方は「戦争は身近にあると伝えたい」と答えたそうです。

正直な所、私はこの言葉を聞いてもそこまで実感がありませんでした。実際にウクライナの戦争の様子をニュースで見ても、どこか他の世界で起こっているような他人事のように思えていたからです。

しかし、『戦争語彙集』の内容を聞いていくにつれ、戦争は身近にあるという事が実感できました。戦争から避難してきた人は恐ろしいほど何の音も発せず、抜け殻のようでその場は恐ろしい程の沈黙だった事。ボランテアとして列車で避難してきた人達に温かいココアやツナサンド、お菓子を渡そうとして準備していたのに、避難してくる予定の大勢の人達が避難所にたどり着く前の駅で空爆のため死んでしまい、準備していたココアなどを受け取る人がいなくなってしまった事。大切なペットの猫と一緒に避難しようとしたのに、途中で猫を連れての避難は大変だからあなたが死ぬ事になると言われ、猫を手放すことを余儀なくされたおばあさん。どの内容も戦争のグロテスクな表現や残酷性を伝える直接的な言葉があるわけでは

なく、非日常の中の日常を描いた短いエッセイです。私自身、これらの話を聞いて実際に戦争を経験していなくても、戦争は身近にあるということを実感できました。

日本は戦後70年以上の間、戦争をしていません。戦争を経験していない世代が多く、平和ボケしている今だからこそ、戦争について本当に知るところ事がこれからとても大切になってくると思います。私もニュースに対して、実際はどうなのかなど具体的に考え調べて、行動するという癖を身につけていきたいと思いました。

想像する力（S・Mさん）

『戦争語彙集』という戦火を逃れてきた人々から聞き取ってまとめた本の中の話を交えながら、戦争のリアルな姿をお話していただきました。

私はお話を聞くまでは、戦争＝爆撃、攻撃、大きな音、と激しいイメージでいました。しかし、当日に取り上げられた3つの話の中に、激しい言葉はひとつも使われていませんでした。むしろ優しい言葉で、何気ない日常を切り取っていました。

しかし、キャンベルさんのお話から、その地域で起こった爆撃の様子を知り、その文が書かれた背景に何があったのか知ることができ、優しい、落ち着いた言葉から、悲しさや、やるせなさも感じました。

また、口調だけでなく使われている単語も、私たちと変わらないものです。当日に聞いた3つのお話の題名も「ココア」、「猫」、など、私が本屋でこの本を開いてみた時にも「ケーキ」、「キノコ」、「シャワー」など、題名になっている単語に目新しいものはありません。全てみんなの日常の中に当たり前に潜むものです。戦争が始まって、人々へ

新しい言葉が入ってくるのではなく、今まであった何気ない言葉が頭の中で別の思い出として変わっていつてしまうことがあるのだと知りました。

私は今回のお話で、話の内容を何も考えずにそのまま鵜呑みにするのではなく、書いている人は何を伝えたいか、何を思っているのか、それを想像することが大切なのだと分かりました。

そして、想像するには、今回キャンベルさんが一つ一つのお話に解説を加えてくれたように、話が書かれた背景やストーリーを知ることが必要となります。今、スマホ一台で、SNSやニュースから簡単に情報を得ることができます。簡単に得られるからこそ、簡単に分かった気になってしまふ、この社会の中で、今回学んだ、ただ分かった気になるのではなく、読み砕いて、自分なりに推測して、自分のものにしていく力が大切だと感じました。



私たちに何ができるか？ (M・Cさん)

ロバート・キャンベルさんによる高校生公開授業「戦争のなかの言葉への旅」に参加して私が感じたのは、戦争そのものと、それにより苦しんでいる人々の感情の生々しさです。

現代を生きる私たちは「戦争」に対して、歴史の本の中のもの、または遠い国で起こるもの、というような距離感を持つている人が多いと思います。これは、日本が第二次世界大戦を経て、日本国憲法に定めた「平和主義」が現在まで守られてきたからだと思います。

特に戦後に生まれた人たちにとって戦争は、時間的・物理的・心理的に遠いものです。それだけ、日本が平和を維持していることはとても幸せなことですが、まさに今、同じ地球上で起こっている戦争に対して危機感を持っていないのは問題です。ウクライナとロシアの戦争のニュースを見て、「酷い、怖い、嫌だ」というような感情が一時的に生まれても、そのリアルな危機感を感じている人はどれくらいいるのでしょうか。現在も不安定な国際情勢。日本だって明日、急に戦争に巻き込まれる、なんてことがないとは言いきれません。

日本の平和を、世界の平和を守るには、どうしたら良いのでしょうか？ 私たちに何ができるのでしょうか？

キャンベルさんの「私たちは当事者にはなれないが、人々が書いた文章から共感することはできる」という言葉が特に印象に残っています。今私たちができるのは、少しでも当事者たちの声に耳を傾け心を寄せ、何かできることはないかと考えること

だと思います。少しの募金でも力になると思います。直接尽力できるようなことはなかなかなくて歯痒い思いもありますが、こういった現状を知らんぷりしたり、他人事で済ませるよりは、よっぽど良いと思います。

また私は、お話を聞いていて、何が大量の人を殺す戦争を始めることを決断するまでに人を追い込むのか、もつと調べたいと思いました。ロシアの戦争を始めようと言った人と本気で向き合い、話をしてみたいと思いました。その人もきっとただの人間で、小さい頃には友達と遊び、一輪の花を大切に育てたかもしれません。現実的ではなさずぎると怒られるかもしれませんが、一旦難しいことは抜きにして、子どものようにシンプルな気持ちで、「もう戦争はやめよう」と、「仲良いくこう」と、そんなふうになんかできたらどれだけ良いかと考えてしまいます。

ロシアの人も、ウクライナの人も、幼い頃にお父さんやお母さんと読んだ共通の絵本と思い出があるかもしれません。同じ映画を観て、涙を流したこともあるかもしれません。そうやって、一人ひとりを人間として、大切な命として想い合うことができれば、どれだけ難しい問題があったとしても、きっと、殺し合うよりもっと良い解決方法が見つかると思うのです。

また、少し本題とはずれますが、キャンベルさんの話す丁寧な日本語を聴いて、日本語を愛し、大切にしてくださっているのが言葉の節々から伝わってきて、すごくうれしい気持ちになりました。言葉を大切にすることは、行動を大切にすることと密接に関係していると思うので、私も自分の話す「ことば」を大切にしようと思いました。

4 5 6	れ、教科書や資料などを使って調べる。	○課題別のワークシートを使い、まとめる。	※早く終わったら次の課題に取り組ませる。
発 表 す る 7 8 11	（４）課題別に発表する ①地震災害について発表する ○地震の原因 ○被害状況 ○被災者の実態 ○被災者支援 ○被害防止対策 等	（４）〈グループ別ごとに調べたことを発表する〉 ①〈地震災害と住民の暮らし〉 ○地震はどこで、どうして起きるのか？（原因） ○地震災害にはどのようなものがあるか？（被害の様子） ○地震の被災者はどうしているだろうか？（被災者の暮らし） ○地震対策はどうなっているのか？（防災）	※発表順番は特に拘らない。 ※人々はいつ起きるか分からない地震大国日本の中で生活していることを知り、どう生きていくかについて考えを持たせる。 ※災害は複合的におきていることにも気づかせる。 ※発表内容はみんなで共有する。（ワークシート使用）
	②津波災害について発表する ○津波の原因 ○被害の実態 ○被災者の実態 等	②〈津波災害と住民の暮らし〉 ○津波はどうして起きるのか？（原因） ○津波被害の実態は？（被害の様子） ○津波から命を守るためにはどうしたらいいか？（防災対策） 等	※東日本大震災等の被害状況から学習させる。 ※災害は複合的におきていることにも気づかせる。
	③原発災害について発表する ○原発事故の実態 ○復旧・復興の実状 ○放射線が自然界へ及ぼす影響 等	③〈原発災害と住民の暮らし〉 ○福島第一原発での事故の状況は？ ○身近な地域で原発事故が起きたら？ ○原発被災者の人たちは？ ○復旧・復興は現在どうなっているか？ ○国内の原発の状況は？ 等	※福島第一原発事故を中心に学習を進める ※福島第一原発周辺の人々の生活の様子をつかませる。 ※災害は複合的におきていることにも気づかせる。
	④風水害について発表する ○風水害の実態 ○被害拡大の原因 ○風水害防止対策 等	④〈風水害と住民の暮らし〉 ○風水害の被害について発表する。 ○風水害が起きる原因や背景は？ ○複合災害に遭った人達の暮らしは？ ○風水害の被害を減らす対策は？ 等	※地球温暖化との関連性に注目させたり、被害を少なくするための森林の役割にも気づかせる。 ※災害は複合的におきている。
	⑤火山災害や雪害その他の災害について発表する ○火山・大雪その他の災害の実態とその防止対策 等	⑤〈火山災害や雪害その他の災害等と住民の暮らし〉 ○火山災害や大雪・その他の災害について ○火山災害や雪害・その他の災害等を減らす対策について ○その他いろいろな災害対策について 等	※その他の災害については（２）の話し合いにより進める。 ※写真や地図等で確認する。 ※災害は複合的におきていることにも気づかせる。
ま と め る 12	（５）災害避難生活者の実態をまとめる ○避難生活（地震・津波・原発等）の実態をつかみ、暮らしを守るための取り組みについて調べる。	（５）〈被災者の暮らしについてまとめる〉 〈被災者救済への取り組み〉 ○被災者はどこでどんな生活（衣食住）をしているか？ ○被災者のこれからの暮らしをどう立て直したらいいのか？ ○国や自治体はどんな支援や援助を行っているか？ 等	※能登半島・東日本大震などを参考にまとめる。 ○国・自治体の被災者支援計画等を調べる。 ・避難所生活の実態 ・自助・共助の内容とは ・公助の内容とは ・被災者支援のあり方 等
ま と め る ・ 生 か す 13	（６）防災・減災対策についてまとめる ○災害から命を守るための防災・減災対策をまとめる。 ○災害から命を守るために学習したことをどう生かすか考える。	（６）〈命を守るための取り組みについてまとめる〉 〈防災・減災対策への取り組み〉 ○災害から命を守るためには何が大切か？ ○国や自治体の防災・減災対策は？ ○自分や家族はどうしたらよいか？ 等 〈学習したことを生かす〉 ○①から⑤までの学習を振り返って、災害に遭った時には、どう行動したらよいか自分の考えや意見を書く。	○国・自治体の避難計画や防災・減災対策等を調べる。 ※自分が住んでいるところで、災害が発生したらどうやって命を守るかを考えさせる。 ※日常生活の中で学習したことを生かすために、文章化したり、キャッチフレーズや標語などで分かりやすいようにまとめさせる。

（３）ワークシートや参考文献・資料等の紹介（省略）

※ 授業したい方には、授業の細案や具体的な資料を提供致しますので、みやぎ教育文化研究センターまでご連絡ください。
（宮城県歴史教育者協議会）

「災害から命を守る」 学習プラン作り

熊谷鉄治

1 はじめに

宮城県歴史教育者協議会ではこれまで「東日本大震災の学習プラン」作りに取り組んできた。4年生と6年生のプラン作りが終わり、2024年1月から5年生のプラン作りに取り組もうとした矢先、1月1日午後4時10分頃「能登半島地震」が起きた。さらに、この年の9月には能登半島に記録的な豪雨が続き、地震の被災者は複合的な災害に見舞われることになった。近年の温暖化などの影響により、災害が同時多発的に複合的に起きる状態が続くようになってきたのである。こうした現状から、学習プラン作りの作業もいろいろと軌道修正を行ってきた。教科書に載っている自然災害ばかりでなく、人災や複合的な災害を視野に入れたプラン作りに心がけた。時間確保には、「オリエンテーション」の1時間と（1）「自然災害を防ぐ」の6時間と（2）「わたしたちの生活と森林」の6時間を当て、13時間を災害学習に当てることにした。（3）「環境を守るわたしたち」は4大公害学習の内容なのでそのまま残し、（2）のねらいは、（1）の災害学習の中で消化できると考えた。いろいろ検討を重ねてきた結果、当初のねらいである「東日本大震災の学習プラン」作りから、「災害から命を守る」学習プラン作りをするに至った。

2 小学校社会科5年生 「災害から命を守る」学習プラン（13時間扱い）

（1）単元の目標

我が国で最近起きている様々な災害について、災害の発生の原因や場所、被害の状況などについて調べ、被災者の救済・くらしや命を守るための防災・減災などの取り組みについて理解し、命を守るための考えや行動力を育てる。

（2）指導計画（略案）

時	本時のめあて	主な学習活動・内容	留意点・資料・その他
学習課題をつかむ 1 2	（1）オリエンテーション ○最近の災害について話し合い、学習への関心を持つ	（1）〈いろいろな災害についての学習課題をつかむ〉 〈自然災害が多い日本の国土〉 ○最近起きている災害ではどんな被害が起きているのか話し合う。	○能登半島地震・東日本大震災・最近起きている災害から具体例を出させる。 ※福島第一原発被害にもふれさせる。
	○自分の学習課題をつかむ ○災害への関心を持ち、調べ学習の課題を持つ。	〈自分の調べたい課題を見つける〉 ○災害はいつ、どこで、どのように起きるのか？ ○どんなことを調べてみたいか話し合う。	○身近な地域で起きた事や最近話題になっている事などから、災害の種類・被害状況・災害対策・避難生活等について出させる。
たてる 3	（2）学習計画をたてる ○テーマごとに調べたい内容を考える。	（2）〈課題解決の計画をたてる〉 ○課題ごとにグループづくりをする。 ○課題にそってどんな内容を調べるか計画を立てる。（自然災害・人災・その他災害）	○ワークシートを使って調べ学習の計画を立てさせる。 ※何をどうやって調べるか見通しを持たせる。
調べる	（3）課題別ごとに調べ学習をする ○課題別にグループに別	（3）〈課題別グループに別れ調べ学習を行う〉 ○それぞれの課題について、教科書や資料・ビデオなどを使って調べ学習を行う。	○教科書や資料、ビデオ、新聞、家での聞き取り等からワークシートにまとめさせる。



没後40年 林竹二先生のこと

「無根樹」の前に立ち想う

春日辰夫

1985年4月2日朝、電話が鳴る。林先生の奥さんから。「林が昨日亡くなり、これから火葬場に参ります。できれば行く前に林の顔を見てやっていただきたいのです。おいでいただければお待ちします」と。「すぐ参ります」と、北山へ急ぐ。

お会いした先生は、これまでと少しも変わらない温和なお顔で迎えてくださり、「あ、春日せんせい！」と言われそうな気がして、一瞬、手を合わせるのをためらった。

短い時間だったが、手を合わせる頭の中を、林先生とのこれまでのことがぐるぐると回った。

たいへんお忙しい先生と知りながら、いろいろなことをお願いしたが、先生とおつき合いは、私が県教組の教育文化部担当の1975年10月の教育研究集会の講演をお願いしたことに始まる。電話でのお願いに、「今日6時、分析センターでお会いしましょう」とのこと、お会いしての話し合いになった。私は、「学生時代先生のソクラテスの脱落者です。」と自己紹介をし、講演願いの意図をお話した。先生は、前年の教研講演者のことも調べておいで、「私はずいぶん違いますけど」と話され、私は、断られてはと必死に防戦。受けていたたく。

それからは「授業」のことを話し合い、演題の「授業の可能性」は、後日、先生からお話いただいたように記憶する。集会会場は鳴子だったが、講演だけは、一般の方にも聴いていただき易いよ

うに古川会場にした。

後日、講演記録を、宮教組の機関誌「教育文化」に加筆して掲載させていただく。先生は「これから講演依頼があつたら、前もって『教育文化136号』を読んでおいていただくとうれしい」と申しましよう」と話され、この136号は、後にも先にもない増刷となり、先生もたいへん喜んでくださった。

現場に戻った私は、77年1月の日教組全国教研沖縄集會に参加することになったことを、先生から時々いただく「林です」という電話のおりにお話したことがあつた。すると、先生は、「私も、1月、あなたより少し早く、沖縄に行きます。久茂地小学校での『開国』の授業です。全国教研開国行事の講演を聴きたいと思っています。私を会場に一緒に入れてください。」とのこと。時間・場所の打ち合わせをし、先生と沖縄でお会いした。

沖縄でお会いするや、先生の第一声は、「今度の授業は、前よりも少し良くできそうです。新しい資料が見つかったのです」と、満面に笑みを浮かべるのだつた。それから一緒に会場に入り、地元作家の講演を先生と並んで聴いた。後日、沖縄から帰られた先生から、ご丁寧な電話をいただいた。

先生のお宅にお邪魔した折、先生が東京高裁民事部で話された「意見書」なるものをいただいたことがある。

これは、現在の世田谷区長保坂展人さんが中学生時代に起こした民事裁判の支援陳述である。67ページに及ぶ意見書の終わりは、

「いま教師に教育者としての専門性があれば、こんな問題は生じません。管理的発想があつて、教育がないのです。良心をもふみにじる力が学校の教師に与えられているところに深刻な問題があるのではないのでしょうか」と結ばれていた。

この陳述書の日付けは、1981年3月4日になっているが、この一週間前の2月23日に、私のクラス（鹿野小学校6年2組）で、先生に「人間について」の授業をお願いしていたことに今度気づき驚いた。

この授業も、学校や市教委という面倒があつたのだ。私は、最悪の場合を考えて、「授業」は、午前授業になっている水曜日の午後に設定し、場所も、近くの公民館をおさえておき、交渉をつづけた。

校長は「市教委がよいと言えば」と言うのだが、その市教委がダメで、最後は「指導案の提出を」とまで言ってきた。私はそれを拒否し、結局、年休をとり、公民館会場になったのだ。

せっかくの授業を、先生にはたいへん申しわけなく思った。先生は、この間、直近に裁判の陳述があることは一言もお話にならなかった。

それから半月後ぐらいに、電力ホール向かいの「こけし旅館」（先生が仕事でよく使っていた）で、小野成視さんが撮ってくれた写真選びを、先生と太郎次郎社の浅川満さんとの3人でやったことと思い出として残る。

林先生と遠藤豊さんの対談集『いま授業を変えなければ子どもは救われない』を太郎次郎社から出版しているが、「この時の授業を写真と一緒に入れたい。授業については、あなたが書いてください」との先生のお考えで、第3章授業記録「人間について——授業と子どもたち」は、先生と私での章となった。もう少し加えれば、著作集第1回配本『運命としての学校』の第4章「ある授業の記録から」は、前段が、この日の先生の授業であり、後半は「教育委員会は何のためにあるか」で、この日の教育委員会のあり方に対しての批判になっている。思い起こせば、市教委の対応についての私の話を黙って聞いておられたが、内心は穏やかではなかったのだ。この文は「私はひどい観念派だが、また実証派でもある」

と書き出されている。

その後、先生から、「林です。今、伊豆にいます」という電話を時々いただいた。著作集のためのお仕事だった。冬はお宅に戻れるということなので、1984年1月5日の宮城民教連冬の学習会での講演をお願いした。演題は「戦後教育の初心と今私が教育に期待するもの」と決めていた。

講演会が近づいたある日、「私の著書で、家に複数冊あるものを、集会で売って、あなたたちの会の資金にしてください」というお話までいただいた。講演会も盛会裏に終わり、いただいた著書も完売し、先生にもたいへん喜んでいただいた。

先生が、その2か月後の3月末に大学病院に入院されたことを知ったのは翌月だった。面会は可能だと病院に確かめ、それから月1回、病室を訪問した。先生は特別にお変わりなく、いつも邪魔しても、横になったままで話すという事はなかった。一度は車椅子で構内を一緒に歩いたこともあり、快復していると思っていた。

著作集は、第4回配本まで、先生の「巻末に」が付き。それ以降は付くことがなかった。最後の第10回配本は1987年9月で、これに付いた著作集月報の結びは、奥さんの「没後3年著作集完結に因んで」と題する文で閉められた。以前、先生が『田中正造の生涯』で毎日出版文化賞の授賞式に、体調不良で奥さんが代理で出られたそうだが、著作集も奥さんによって閉められてよかったと、私はひとりそう思った。

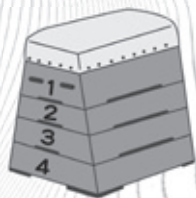
私は、年に一度、北山霊園の墓碑銘「無根樹」の前に立ち、独り言をつぶやいている。

（元研究センター所長）

元宮城教育大学学長の林竹二は、生前、全国の学校を訪れて授業を行い、教育現場に大きな問題を提起した。1985年4月1日没。今年、没後40年にあたる。

子どもはあてき、 授業はおもしろい

高橋 桂 吾



はじめに

私が教員になったのは15年前のことです。この15年間は、様々なことがありました。東日本大震災や新型コロナウイルスなど、普段の生活を揺るがす様々な社会の変化を経験しました。どんなに大変な時でも、「子どもはすてきな」と思える瞬間がありました。必ずしも、全てが良い思い出ではありません。授業の未熟さ、生徒指導の難しさ、家庭との両立など、悩んだり挫折しそうになったことも多々あります。しかし、振り返ってみれば、私を教師として成長させてくれたのは子どもたちであり、支えてくれたのは、素敵な同僚の先生方、そして家族の存在でした。今回は、私を教師として育ててくれた子どもたちや先生との思い出、私の軸となった授業について、お伝えできればと思います。

遊ぶことの大切さを知った初任の頃

初任の学校は、北部にある閑静な田園風景と渡り鳥、明るい子どもたちの声が響く素敵な学校でした。初めての担任は4年生。この1年は、本当に右往左往しました。分からないことが分からない状態の1年間。何から何まで時間がかかり、苦勞の連続でした。なのに、なぜか学校での生活が苦にならないのです。それは、担任した子どもたちのおかげでした。不安を抱えて出会った学級開きの日、子どもたちとどう接していいのやらと思っていた矢先。A君「先生、遊ぼうー」T君「早く校庭行こうよー」Hさん「先生、鬼ね」と自然にかけられた言葉に、何がなんだか分からないまま、あつという間に校庭に出ていました。スーッと着たまま23人の子どもたちと鬼ごっこ。本当に楽しかったのを覚えています。これが、私の一番古い、担任としての記憶です。2日目からは、学年全員での鬼ごっこが始まりました。休み時

間の度に外に出て遊んでいると、いつの間にか、保護者の方からも子どもと一緒に遊ぶ先生として知られるようになっていました。学年主任からは「若いから、今のうちにいっぱい遊んで。学年のことは全部任せて」と言っていたとき、私が子どもと関わる時間を最優先に学年を運営していたきました。今思えば、なんとありがたいことか。おかげで、全力で鬼ごっこやサッカー、こま回しにけん玉、竹馬に一輪車、フラフープなど、さまざまな遊びを子どもたちと経験しました。遊びを通して、子どもとの関わり方の大切さを学ぶことができました。遊びの大切さを教えてくれた子どもたちに感謝しています。今でも、初任の頃のように毎日とはいきませんが、子どもと外で遊んでいます。

校長先生、ありがとうございます

授業は散々、課題だらけです。今でも悩む事ばかりです。むしろ、今だからこそ悩む事が多いのかもしれません。初任の頃は、右も左も分からないので、がむしゃらに授業に取り組み毎日でした。毎週、指導案を書いて取り組んだ初任研授業は大変でした。ある日、授業を見に来てくださった校長先生に、放課後、校長室に来るように言われました。内心、授業の改善点をたくさん言われると思い、緊張していました。ビクビクしていた私に一言。「朱書き通りに教えられただけで正直すごい。俺でも授業は難しい」と言ってくださり、啞然としたのを覚えています。その後、続けて、「授業は生き物。子どもと先生で育てるものだから、チャレンジしなさい」と教えていただきました。校長先生の言葉で、思い詰めていた何かがすつと解けていく感じがしました。校長先生でも難しいなら、自分にできなくて当然。その日から、目の前の子どもたちだからこそ一緒に何が学べるのかを考えて授業を組むようになりました。

た。この日を境に、私は授業を「こなす」から授業に「取り組む」にイメージが変わったのだと思います。しかし、今でも「こなす」になってしまっているなど感じる時はしばしば……まだまだ精進は足りません。

詩の授業って楽しい

私が取り組んできた授業の中で、忘れられないものがいくつかあります。その中の一つが詩の授業です。特に、「とびばこだんだん」（作：藤哲生）で行った授業は今でも心に残っています。この詩は、跳び箱に挑戦する子どもの様子を詠んだ詩です。この詩を用いての授業は、子どもの想像力の素晴らしさ、授業を行える楽しさを感じました。たった45分の授業ですが、この授業を準備するのに3か月以上の時間をかけました。きっかけは単純。私が詩の授業を苦手と感じていたからです。何をどう教えていいのか分からない。人それぞれ感じ方が違うものをどう学習するのか……よく分からないからこそ取り組んでみようと思いました。様々な指導案を読み、実践記録に目を通し、先輩方に意見を聞き、試行錯誤を繰り返しました。そんな中、詩の授業で何を学ぶのかを改めて考えてみました。たどり着いた答えは詩を「味わう」でした。

味わうとなると、どのような詩が3年4組の子どもたちにもたにいいのか、また新たな悩みが生まれました。教科書の詩ももちろん学びます。でも、なんとなくこの子たちの実態とずれている気がするのです。3年4組は、クラス名を「オーロラスカイ学級」と名付けた子どもたちです。個性豊かで意欲満点。一人ひとりが強烈な個性の持ち主で、いつでもキラキラ輝いていました。何にでも挑戦し撃沈も厭わないD君。常に1位を目指したいEさん。何でも知ってる物知りT君。どんな意見もまるっと調整するYさん

……。素晴らしい個性のある子たちが、「知りたい」「話したい」「考えたい」となるような詩はないか、来る日も来る日も探しました。そして、出会ったのが「とびばこだんだん」でした。「ああ、これだ！」と思わず声を出したほどです。自分が楽しいと思える教材は最高です。この時、教材と出会うことの意味、教材分析のおもしろさをはっきりと感じました。

「とびばこだんだん」という詩は、図形詩という種類にあたります。視覚的に跳び箱に見える形になっています。どのように子どもたちに出会わせるか、悩みに悩んだ結果、題名のみを提示することになりました。子どもたちの反応は最高でした。D君は「とびばこだつて！ 僕たいすき！」、Eさんは『だんだん』って何？、T君は『だんだん』は段数のことじゃないなど、題名から自由に発想する子どもたち。教材そのものの持つ魅力を改めて感じました。いったん子どもたちが落ち着くのを待つてから、本文を少しずつ提示、1行ずつ提示されることに子どもたちのワクワクは高まりました。途中でYさんが「この詩、跳び箱になつていて！」と一言。もう、そのとたんに驚きの声とワクワク感が教室に広がりました。この詩と子どもたちが一気に繋がった瞬間



でした。本当に嬉しかったです。

自分の生活経験から『だん』は踏み切る時の音だよ」と話すD君。「いやいや、もしかしたら跳び箱がたかくなつていく様子を表しているのかも。」とEさん。「二人じゃなくて、クラスで練習している様子じゃない」とYさん。「最後の行の『だん』は決意かも」とEさん。もう、想像の連鎖は止まりませんでした。跳び箱を跳んでいる子は何歳なのか、男の子なのか女の子なのか、はたして何人取り組んでいるのか……詩の言葉と自分の生活経験、友達の意見を混ぜ合わせ、どんどん膨らむイメージ。最後は、詩から読み取った情景を音読で表現し授業の感想を書いて終了しました。本当に楽しい時間でした。子どもから「詩って、気持ちが伝わってきて楽しかった」や「同じ詩を読んでいるのに、みんなイメージが違っていて、話すことが面白かった」など嬉しい感想をもらいました。

今でも、この授業に取り組んでよかったと思っています。教材分析のおもしろさ、児童理解の大切さ、教師としての思いの重要性など、様々なことを感じました。また、詩の授業のすばらしさ、「味わう」とはどういう事なのかを捉えられたと思っています。まさに、「授業は生き物」ですね。

おわりに

教師は特殊な職業だと思います。保護者以外に子どもの人生に大きな影響を与える存在です。大変で辛いこともあります。でも、子どもたちのたくさん笑い声やすてきな笑顔、成長していく過程を一番近くで見ることのできる存在でもあります。子どもの成長は本当に嬉しいものです。子どもたちと関わり、すてきな時間を共有できる嬉しさを忘れず、これからも精進していきたいと思っています。

（富谷・明石台小）

●教育時評

技術教育のための

教育条件整備

三谷 高史

情報と私たちの生活

ある日、リビングのテレビを起動すると、YouTubeの画面が映し出された。よく小学生の娘がテレビでYouTubeを観ているのだが、画面にはこれまでの検索キーワードや視聴した動画をもとに提案された、いくつかの動画（主に低価格帯の化粧品品の紹介動画）が表示されていた。

こども家庭庁の「令和6年度青少年のインターネット利用環境実態調査」（速報値）によれば、6～9歳の30・7%（回答数270）、10～12歳の72・0%（回答数457）が自分専用のスマートフォンを所有しているとされる。インターネットの利用内容として「動画を見る」という回答が全年齢層で最多となっており（全体で93・6%、回答数3238）、利用時間も前年よりも16分伸びて約4時間57分となっている。歴史的にみて、消費の主体は共同体↓世帯↓個人と個別化されてきた。かつてはマスメディアを通して一斉に配信されていた商業広告も、現在ではさまざまなアルゴリズム（計

算手段）によって個別に最適化され、個人所有の端末を通して直接伝達されるようになっていく。子どもたちは自ら検索し、選んで視聴しているつもりでも、ユーザーからは認知しにくいアルゴリズムによって個別最適化された情報（動画や差し込まれる商業広告）を与えられ、消費意欲を刺激されている。

私たち大人も何かを決めたり、購入したりするためにインターネットで情報収集をすることは多いが、検索結果の上位に表示される情報は本質的に関連性が高いものというわけではなく、SEO（Search Engine Optimization＝検索エンジン最適化）対策されたものが多い。さらに私たちの情報収集や購入行動そのものもデータとして蓄積されていく、という再帰性もある。このように私たちの生活における情報経験は複雑なものとなっているが、子どもたちがそれについて学んだり相対化したりするような機会は今の学校にあるのだろうか。

技術教育と情報

GIGAスクール構想推進開始から6年が経過し、現在は小学校から高校までプログラミング教育が必修化されている。現行の学習指導要領を確認すると、小学校においては情報活用能力が「学習の基盤となる資質・能力」の一つに位置づけられているが、具体的には情報手段の基本的な操作、プログラミングに必要な論理的思考力育成に限定されており、その他の教科について確認しても、情報技術や情報社会について学ぶ

機会は少ない。

中学校では「技術・家庭科」の技術分野に「情報の技術」という領域があり、そこには情報技術の基礎や情報モラル、制御プログラムの作成やデバッグ（プログラム上の誤りの特定・修正、双方向的なコンテンツのプログラミングなどを学び、生活や社会における問題の解決に取り組むことが明記されている。そして、最終的に生徒が「生活や社会、環境との関わりを踏まえて、技術の概念を理解すること」、「技術を評価し、適切な選択と管理・運用の在り方や、新たな発想に基づく改良と応用について考えること」ができるような指導が求められている。

情報技術そのものを学びつつ、情報社会における自分の生活を捉え返していくような高度な内容が謳われているのだが、その実施のためには十分な時間や環境が必要となる。しかし、中学校技術教育の教育条件はかなり厳しい。確かにGIGAスクール構想の推進で学校の情報インフラや端末は充実したかもしれないが、問題は時間と教員の数である。

中学校技術教育の標準時間数は1977（昭和52）年告示の学習指導要領以降、削減され続けてきた。1977年に3年間で315時間から245時間に、1989（平成元）年からは「技術・家庭科」（男女共修）に統合され、その上210～245時間とされたため、実質半減である。さらに1998（平成10）年からは175時間へと削減されている。現在の「情報の技術」は3

年次実施が想定されているが、3年次の標準時間数は35時間であり、技術・家庭分野はそれぞれ17・5時間となる。これは全教科で最も少ない時間数である。次に教員の数の問題であるが、それは臨時免許状（臨免）の発行数、免許外教科担任（免許外）の許可件数にあらわれている。「令和5年度教員免許状授与件数等調査結果」によれば、「技術」の臨免発行数は322件、免許外許可件数は2069件で中学校の教科の中で最も多い。また、文科省の「中学校技術・家庭科（技術分野）の指導体制に関する実態調査」（2024年2月）によれば、2022（令和4）年度の技術担当教員は全国で9719人、そのうち2245人（23%）が臨免・免許外であった。

高校の状況をみると、必修化された「情報Ⅰ」の標準単位数は2であり約70時間となる。「情報」の臨免発行数は164件、免許外許可数は337件と数は他教科と比べると多くなっているが、ここ数年で大きく減少しており数字上では改善の傾向にある。

令和10年までに

臨免・免許外を0に!?

中学校技術教育の教育条件の問題は文科省も当然把握しており、2024（令和6）年2月の通知「中学校技術・家庭科（技術分野）の指導体制の一層の充実について」で2028（令和10）年までに全自治体において臨免・免許外での担当を0とすることを目標に掲げ、施策パッケージを打ち出

した。その内容は(1)改善計画の着実な履行、(2)教育委員会における体制整備、(3)免許法認定講習等の実施、(4)複数校指導・遠隔教育の推進、(5)コンテンツの充実、(6)担当教員の研修機会の充実である。

しかし、いずれの施策も根本的な問題解決にはあまり寄与しないように思われる。例えば(1)は教員採用・配置に関する各自治体の取り組み（免許保有者の継続的な採用等）に関するものであるが、非都市部の学級数が少ない学校などでは、どうしても標準時間数の多い教科の教員の配置を優先せざるを得ない。(3)は現職教員に「技術」の普通免許状の取得を推奨するものだが、取得した場合の仕事量増加や職業アイデンティティが問題となる。(4)の複数校指導は既に実施している自治体もあるが、本務校でクラス担任やその他の校務分掌を担当できなくなるため、生徒や同僚教員と関わりながら成長する機会が奪われることにつながってしまう。

根本的に国が教職員定数や標準時間数を見直さない限り「指導体制の一層の充実」は難しいだろう。また、近年は「技術」の教員免許を取得できる大学が国公立・私立問わず減少している。現在、東北地方でも国立と私立あわせて4大学しかない。教員養成も含め、国レベルでの全面的な対応が求められる。

できることはなにか

とはいえ、そのためには時間がかかる。眼前にある問題には応急的にでも対応して

いかねばならない。(6)にあるような研修、特に臨免・免許外で奮闘している教員への十分なサポートは急務であるし、各自治体、教育委員会レベルでもできることもあるだろう。例えば、高知県土佐町では村費負担教員制度を新設して臨免・免許外指導を解消しつつ、町議会が根本的な問題解決を求める意見書を県と県教育委員会に提出している。これは教育研究者でもある鈴木大裕町議会議員が中心となった取り組みであったが、鈴木議員は次のように述べている。「子どもたちのために十分な教育環境を整えるのが政治の役割だ。地方議員なら、手始めに過去5年間の免許外教科指導の実態を教育委員会に問い合わせてみるのはどうだろうか。保護者なら、地域の議員に調査するようアプローチした方がいい。免許外教科担任を強いられたことのある教員が声をあげ、経験を語ることも大事だ。」（月刊『クレスコ』2021年4月号）

今回は技術教育に焦点を当てたが、家庭科や美術、音楽なども同様に厳しい教育条件となっている。臨免・免許外の常態化は教員の労働環境・条件の問題であり、同時に子どもたちの教育環境、教育を受ける権利の問題でもある。市町村費負担や再任用での応急的なアプローチは宮城県内でも既に取り組まれているが、根本的な問題解決を目指すためには、各地域の実情と教育要求を的確に捉えた教育運動も必要だろう。

（宮城教育大学）



おすすめ映画

大山あけみ



「型破りな教室」

クリストファー・ザラ 2024年

メキシコの小学校で実際にあった教師と生徒の秘話を映画化したものだ。世界の映画祭で大きな反響を呼び、メキシコでは2023年の年間興行収入1位となる大ヒットを記録した作品である。

舞台は麻薬と殺人

が日常化し、汚職と暴力が蔓延する町マタモロス。ホセ・ウルピナ・ロベス小学校は、国内最底辺の学力で、教育設備も劣悪でパソコンもなく、この現状に教師たちも匙を投げていた。



2011年フアレス教師が赴任し6年生の担任になる。彼は国の教育方針や既存のテキストにとらわれない、ユニークな学びの場を実践していく。すると、子どもたちは学ぶことの喜び、探求することの楽しさを知り、それぞれが持っている天性の才能を発揮していく。劣悪な環境に夢も希望も抱けなかった子どもたちに、光をもたらした型破りな実践と教師の深い絆。その絆が産んだ小さな奇跡を観てほしい。

フアレス教師は、学校を去らなければならなかった。日本も学習指導要領から離れたことをする教師は批判され、学校を去らねばならないことを恐れる。「教えるとは希望を語ること。学ぶとは誠実を胸に刻むこと」ルイ・アラゴンの言葉を思い出し、この映画をみて仲間と共に語りあうことから始めたい。

(元中学校教員)



読書のすすめ(第19回)

矢部智江子

『ファシズムの教室 —なぜ集団は暴走するのか』

田野大輔・著 大月書店 2020年

これは、兵庫県神戸市にある甲南大学で、2010年から10年にわたって実際に行われた「ファシズムの体験学習」の記録です。この体験学習の授業をした田野教授は、歴史社会学者(ドイツ現代史)で、とりわけナチス時代のドイツを研究している方です。この授業では、学生たちが一斉に「ハイル、タノ(タノ万歳!)」と叫んでナチス式の敬礼をし、笛

の音に合わせて教室やグラウンドで行進や糾弾を行います。教師扮する指導者のもと、独裁体制の支持者と化した学生たちが、同じ制服を着てファシズムのような示威行動をくり広げます。

もちろん、これはファシズムの肯定を目的とした授業ではありません。その反対に危険性を認識してもらうことが目的であり、十分な配慮のもとで実施されています。

この本は、「ファシズムの体験学習」を紹介しながら、ファシズムの仕組みと成り立ちを集団行動の観点から社会的に解説しています。

なぜ今さらファシズムなのかというと、近年問題になっているヘイトスピーチなどにも、ファシズムと共通の仕組みを見いだすことができるからだといえます。学生たちは、そうした現代的な問題への対処も学ぶことになるのです。

今日の日本や世界を支配する不寛容な空気や、ファシズムが再来しつつあると言われる状況に危機感を抱く多くの方々には、学べるがたくさんあると思われます。また、そうした危機感を子どもたちに伝えたいと考えている教育関係者の方々にも、問題提起をしている本です。小学校や中学校体育の先生は、運動会や体育祭で、「ファシズム」という意識はなく、全く同じようなことを行っているかもしれません。子どもたちに与える影響について、考えてみるきっかけになると思います。

是非、読んでみてください。

また、ファシズム関連本として、『ザ・ウェーブ』(衝撃の実験授業、アメリカのハイスクールでの実話です)、『帰ってきたヒトラー上下』(小説)も、とてもおもしろいです。

(元小学校教員)



おすすめ
BOOK



みやぎ教育相談センター相談員

日 下 幸 子

相談員を始めて1年、とは言え私は週1日のみの勤務で、学校が長期休業中は休みとなるため、1年間の勤務日は43日程度です。まだまだ戸惑うことばかりですが、センターの皆さんや相談される方々の力をお借りしながら、自分なりの相談員としてのあり方を模索しています。

2年目を迎えるにあたり、自分の1年間の学びについて振り返ってみたいと思います。

養護教諭の経験から

私は元中学校養護教諭です。当初私は相談員について養護教諭の延長上のようなものと捉えていましたが、始めてみて最初に感じたことは、これまでの経験を引きずらず、人として、まっさらな気持ちで対応することが必要だということでした。

また一方で、心身の健康やその他気になることについて幅広く学んでいきたいという気持ちも高まっています。相談される皆さんのお話を伺っていて、自分の専門性だけでなく、人として成長したい、もっといろいろなことを知りたい！という欲求が起こっているのです。養教時代は余裕がなくて、学びたかった本の多くは「積読」でしたが、今は学びたいものを本棚から引っ張り出して読んでいます。興味のある講演会や集会、映画、展覧会、コンサートなどにも足を運ぶことが多く

なりました。

電話相談の難しさ

養教時代の相談活動は、ほとんどが対面での関わりでした。対面のコミュニケーションは、言葉以外に表情やしぐさ、距離感、空気感、沈黙する「間」でも伝え合うことができます。

しかし電話の場合、しかも初めてお話しする方やお会いしたことがない方の場合は「声」がすべてです。言葉の選択だけでなく、声の調子やスピードも意識して丁寧にお話するようにと思っていますが、私自身の不安や「はて？」と思うことは声となつて出てしまい、バレます。そういう時の「間」は、相談者をより不安な気持ちにさせ、私との距離を感じさせてしまっていることでしょう。取り繕うことなく、誠意をもって対応することが大事、と思つていても、正直まだ難しさもあります。もっと心に余裕を持つて、相談される方の気持ちを受け止められるよう、日々精進していきたいです。

子どもたちから学ぶこと

学校や教室で学ぶことに難しさを感じている子どもたちが、相談や学習支援、居場所としてセンターに来ています。その子どもたちは多くのことを私に教えてくれます。

来所した時、子どもたちは相談員に挨拶をしてくれます。子どもと一対一

での関わりの中で、小さな声でも、あえるいは声を出さなくても、表情や姿勢から、お互いの気持ちを通わせることができます。自分の関わり方に不安があった時、子どもの「ありがとうございます」という小さな声が心にしみることはありません。学校では、挨拶は大きい声で、という指導もありましたが、そうとは限らないことを子どもたちから学んでいます。

センターには学校のような細かいルールはありません。各自が、または相談員と一緒に、ここでの過ごし方について考えます。整頓が苦手な子は、自分の使い終わった物を片付けることが努力目標。一度声をかけてもすぐにはできない場合もあり、私は何度も声をかけたくありませんが、そこを堪えて見守っていると、少しずつ片付けたり帰る前に片付けたりと自分なりに取り組む姿が見られたりします。「待つ・見守る」という姿勢、相談員として大事にしていきたいと思っています。

相談員2年目の春、まっさらな気持ちで相談される方のお話を伺い、その心に寄り添い、支援につなげていけるよう、学び続けていきたいと思っています。

「みやぎ教育相談センター」

TEL 022-272-4152

土・日曜と祝日をのぞき

10時から17時

誰もが楽しいキャンパスライフを

佐久間 徹 (センター運営委員)

青葉区の一角で、障害者の学びの場《きおつちよら》を運営して7年になりました。(きおつちよら)は、イタリア語で「かたつむり」

Eさんは買い物のときに、支援を受ければ、頼まれたものを買うことができます。でも、一人で買い物はできません。通って1年すぎた頃、大好きな鶏のから揚げを買うことになりました。突然、「自分で行きます」と、一人で道路を渡って買いものに行くことになりました。心配なので、5階の窓から見ていたところ、買い物を済ませ、から揚げを大事そうに持ってニコニコと戻ってきました。

Eさんはお金を扱うことは苦手でした。昨年の秋、調理をして、お昼をみんなで食べて、ひと段落すると、経済・社会の時間です。Eさんはみんなから調理にかかったお金を集める係です。お金を数えているとき、わたしが「50円と50円だといくらかな?」と聞いたら、50円の硬貨を2枚持ってニコツとして、「50と50で100」。何度も嬉しそうに繰り返しました。それまでは、順番に10円、20円……と数えないと100円を数えられませんでした。50円という塊を認識したのでしよう。それから、お金を計算するのが楽しくなり、家で買い物をする時、「お会計する」と、自分で支払いをしたいというようになつたそうです。認識が広がると楽しさも広がるのでしよう。

子どもの風景「作品について」……鈴木 裕子 (宮城作文の会)

ゆりさんと佳奈さんは仲の良い友だちです。休み時間も2人でよくトラップなどをして過ごしたり、帰りもよく一緒に帰ったりしています。そんな2人に起こった出来事を、その日の日記に2人とも書いてきました。その日、佳奈さんは休み時間も1人で席に座って過ごしていたため、あれ? 2人の間に何かあったのかな? とは思っていました。帰る頃には2人とも楽しそうにしゃべりをしていたので安心しました。2人の間に何が合ったのかを日記で知り、2人の許可をとった上で日記を読み合いました。特に高学年の女の子たちは、相手に確認したり伝えたりできないまま、自分の中でネガティブな感情が大きくなり不安な気持ちや態度や行動に表れてしまうことがあるように感じます。読み合いながら、お互いのことをすごく大切に思っていることが伝わってきたことや、改めて、自分の気持ちをきちんと相手に伝えることの大切さをみんなで共有し合うことができました。

センターの動き

1月

- 12日(日)宮城民教連「冬の学習会」
- 17日(金)第12回事務局会議
つうしん117号発送
- 20日(月)道徳と教育「福沢諭吉」
- 25日(土)『教育』(1月号)を読む
- 27日(月)ゼミナールsirube『人間とその術』第7講1「人間の空間」
- 31日(金)第13回事務局会議

2月

- 1日(土)宮教組G.O.D.O.教研(松島)講演 吉田恵里香さん
- 2日(日)研究部会
- 7日(金)国語ナヤンデルタール『ゆうすげ村の小さな旅館』
- 8日(土)第11回震災のつどい「震災から14年、今教壇に立つて思うこと」
- 14日(金)第14回事務局会議
- 15日(土)高教組教育講座(松島)記念講演 高橋源一郎さん
- 17日(月)ゼミナールsirube『人間とその術』第7講2「風景と家」
- 22日(土)午前・『教育』(2月号)を読む
- 午後・仙台『教育Cafe』
- 26日(水)FM仙台「3・11高校生犠牲者からの『伝言』」収録
- 28日(金)第15回事務局会議

3月

- 1日(土)研究部会
- 5日(水)千葉政典さん卒業授業(愛子小)
- 10日(月)道徳と教育「福沢諭吉」
- 14日(金)第16回事務局会議
- 15日(土)被団協・田中熙巳さん講演会(メディアテーク)
- 17日(月)ゼミナールsirube『人間とその術』第7講3「日本的空間」
- 22日(土)『教育』(3月号)を読む
- 28日(金)第17回事務局会議
つうしん118号発送

編集後記

3月にNHK映像の世紀『死の大地 ドイツ敗走の2200キロ』(独ソ戦)『戦争のトラウマ 兵士たちの消えない悪夢』そしてNHKスペシャル『女性兵士 絶望の戦場』(ウクライナ)を続けて見た。胸が苦しい。何故、人間は戦争をしてきたのだろう。何故、今も人間は戦争を続けているのだろう。その思いが消えない。殺される兵士、老人、女性、子ども……、破壊される都市。なぜこんなに惨いことを人間は続けているのだろう。領土の奪い合い。戦争を命令する支配層の人間がいる。人間の理性はどこにあるのか。新学期、新しい子どもたちとの出会い。平和な人間世界を求めて、子どもたちと共に歩んでいきたい。

(達)

